

教育心理学年報 第1集

105 同上 V —3次元 β 運動視における図形の相似・非相似性の影響—

相似図形を用いた3次元 β 運動視について、年少集団になるほど最適時相の上限は高く、範囲も広くなり、より運動視が生じ易いことが明らかにされた(研究Ⅲ)。従って本実験では図形特性(特に図形の相似・非相似性)について考察した。刺激図形は動きのある人物の線画6組(この中第一刺激と第二刺激とが非相似になっているもの2組, 相似になっているもの4組)。手続は第一刺激提示位置に第二刺激を提示する。提示時間はいずれも200 σ 。被験者は幼稚園児, 小1, 2, 5, 中2, 大学生, 男女各10名; 総計120名。結果は整理中であるが、上限、範囲について、年令; 図形特性間にそれぞれ有意差のあることが予想される。

106 色彩好悪に関する一考察: ○鶴飼香代・蛭川栄(愛知県立女子大学)

色彩好悪に関して、1 標準色紙, 2 具体的事物, 3 絵画の三つの事態につき、それぞれ発達、地域差、性差等の要因についての検討と、具体的事態における色彩嗜好傾向の条件分析を試みた。

その結果、各事態とも上記諸要因による影響がみられ、事態が異なることにより(より抽象的事態とより具体的事態)色彩の嗜好傾向に差異がみられることも認められた。

更に、具体的事物に投影される色彩の嗜好は、実在事物のもつ色彩とそのVariety、事物に対するFamiliarity等の条件によって異り事物の概念的・機能的特性、その事物への直接経験の在り方、個人的特性等の力動的関連において嗜好傾向が規制されることを知り得た。

107 図形認知の発達: 鈴木治(東京学芸大学)

簡単な図形の認知を、触運動知覚→視知覚による再認($x-y$)、視知覚→触運動知覚による再認($y-x$)によって分析した。被験者は、4-8才児78名。認知の誤りは年令の上昇と並行して減少する。 $x-y$ が $y-x$ よりも誤りが少く、減少速度も早い。両者の誤りは発達と共に接近してゆく傾向がある。これと相応じて、図形探索行動、図形選択時に於ける熟慮、選択の訂正、判断のあいまいさの減少などの変化や現れが見られる。図形認知の行動は多くの要因に規定されるが、この研究では、とくに心像による表象作用という視点から考察した。

6~7才から認知行動が活潑になるが、これは心像の発達と関連があることが見られる。

107の2 音声の記号化ならびに体制化過程に関する研究(16) —音声発達テスト作成の試み(9)—: ○村井潤一・中島誠・奥野茂夫・前田民子・清水益実(京都大学)・岡本夏木(京都学芸大学)・田中昌人(近江学園)

3. 方 法

701 職業としての心理学(I) —問題と方法—: ①松本金寿・②宮川知彰・野呂正・柴田薫(東北大学)

心理学に限らず、すべての学問は、それ自身としての意義をもつことはいうまでもないが、同時に又、それに携る学術研究者を離れては成立し難いであろう。戦後著しく発展した我が国の心理学界も、心理学研究者の増加と大量の社会的進出とが大きな背景となっている。然るに、我が国では公式には、一般心理学と教育心理学とが大部分をしめ、アメリカにおけるが如き分化をもっていない。

我々の企図する各種の研究計画は、こうした観点から、内外の事態を精査し、教育心理学のあるべき姿勢を省みるとともに、大学における心理学の研究体制や機能分化に若干の示唆を提供しようとするものである。

702 同上(II) —その歴史と現状—

〔I〕日本心理学会をはじめ諸心理学会の名簿(昭10, 25, 35年版)を分析した。〔II〕結果。(1) 心理学者の絶対数は昭和27年度を境に急増しているが、配置されている各職域の心理学者数の百分率に関する限り臨床施設を除いて大きな変動はみられない。(2) 臨床施設(社会の落伍者を救おうとする消極的教育の場)で活動する心理学者数の百分率は終戦後急増している。(3) 心理学者の活動分野は積極的教育(学校教育)および消極的教育